

書評

川越正平, 川畑雅照, 松岡角英, 和田忠志 著

君はどんな医師になりたいのかー「主治医」を目指して

市村 公一(前東海大学附属病院研修医)

卒後臨床研修必修化が、いよいよ2004(平成16)年度から導入されます。これに伴い「年間入院患者100人に対し1人の研修医, または病床10に対して1人の研修医」という制度上の制約と, 昨年実施された厚生労働省のアンケートでも明らかな医学生側のプライマリ・ケア医, 家庭医志向の高まりから, これまで大半の研修医を受け入れてきた大学病院から大量の研修医が市中の研修指定病院にシフトすることが予想されています。しかし, 個々の医学生にとって肝腎なことは「全体の流れはさておき, 自分はどこで, どんな研修を受けるか」でしょう。今までは「外に出るといっても様子もよくわからないし, 研修後の進路も不安だから」と母校の医局に入局するのが大勢だったものが, ストレート研修が禁止され, 大学に残っても外に出ても, スーパーローテーションでプライマリ・ケアの基本的診療能力を身につけることが求められます。

「どこで, どんな研修を受けるか」―卒後臨床研修必修化に伴って研修先の選定という問題に直面し, 医学生は従来よりも一層真剣に将来進むべき方向を考えることになるでしょう。それも, 必修化の大きな副次効果かも知れません。

その研修先の選定について, しかし, 現状では各病院の研修内容が情報として十分に提供されておらず, また医学生も日本では参加型臨床実習がやっと導入され始めたばかりで, 卒前において臨床現場に主体的に関わることが少ないため, ともしれば有名研修病院に行くことが, すなわちよい研修を受けることだといった短絡的な見方も少なくないように感じます。

ここにご紹介するのは『初期プライマリケア研修』『学生のためのプライマリケア病院実習』(とも

に医学書院)を著し, 多くの医学生の研修相談にのってこられた「若手医師の会」の川越正平先生らが, これまでの経験をふまえて, 全国の医学生・研修医に「主治医」という医師としての1つの理想像を提言するとともに, 卒前に体験すべきことを説き, 初期臨床研修の在り方とそこで研修医が学ぶべきポイントをまとめられた本です。

ここで「主治医」とは「人と人とのつながりを大切にし, 疾患の種類によらず心身各部の診療の求めに応じ, 継続して患者さんの生命と生活に責任をもち続ける医師」と定義され, 家庭医やプライマリ・ケア医にも共通し, かつその本質をなす概念であるとしています。私個人としては, 「家庭医」「プライマリ・ケア医」「かかりつけ医」, そしてこの「主治医」と, そのめざすところの大半はオーバーラップするであろうに, あえて別の旗印をかかげることに, は, 広く市民の理解を得てその輪を広げるうえでマイナスだと考えるのですが, 本書に説く「主治医」の在り方に強い共感を抱く医学生が少なくないことは, 容易に想像されます。

本書は, 第2~4章で卒前に臨床現場を経験することの重要性和卒後研修のポイント, そして臨床の場に出る者としてわきまえておくべき常識や心得を説き, 第5章「どこで, どんな初期研修をするか」で大学病院と一般病院の特徴, その長所・短所と, きたるべき研修システムの理想像を説いています。プライマリ・ケア医志向か専門医志向かにかかわらず, これから臨床研修を受けるすべての医学生に, 最低限この第5章だけは読んで心得ておいてほしいと思います。研修先選びで後悔しないために,

(A5判 184頁 定価(本体1,800円+税)
2002年 医学書院 刊)